

愛媛県におけるカミツキガメ対応状況(2018-2022年の取り組み)

愛媛県立衛生環境研究所 生物多様性センター 主任研究員 村上裕

■はじめに

愛媛県生物多様性センター(以下センター)では、第2次生物多様性えひめ戦略に基づき、県内の外来種対策の推進を図っており、外来種に係る情報収集と対応を業務の一環として実施している。本県には20の基礎自治体があるが、外来種対策を専門とする部署は無く、主に環境保全分野の部署に配属された一般行政職員が対応を行っている。原則として住民からの特定外来生物に関する情報提供は、市町担当部署を経由してセンターに届く体制としており、特定外来生物のうち県内未確認の種や、侵入・定着初期段階と考えられる種は、初動対応として現地調査等を市町担当者と合同で実施し、併せて今後の方針について協議を行っている。

カミツキガメは遺棄単独個体が稀に確認される程度であったが、2017年に過去(2006年前後)と同一地点で複数個体が目撃、捕獲されたことを受けて、センターと市が合同で捕獲調査を実施することとなった。2018年から2022年にかけて42頭が捕獲されたが、各年一定の割合で幼体が捕獲されており、繁殖の可能性は高い。当該地域は外部から隔離された比較的狭い水域で、繁殖初期段階と想定されることから、数年間の捕獲を継続することで成熟個体による産卵を抑制し、根絶に近い密度水準を維持することを今後の到達目標としている。

■調査方法

- (1) 調査方法 : カメ用トラップによる捕獲および周辺踏査による産卵可能域の把握
- (2) 誘引餌 : 魚類の内臓等(地元提供)
- (3) トラップ資材 : 肺呼吸を行うカメが窒息死しないように改良されたカゴわな
(愛媛県内水面漁業調整規則に基づく特別採捕許可申請済)
- (4) トラップ設置と調査内容
 - ① 現地を5か所の水域(A,B,C,D,E)に区分
 - ② 調査水域ごとに4基(Eのみ2基)のトラップを設置(計18基)+水路2基追加(2020年8月以降)
 - ③ トラップを設置翌日の午前中に回収
 - ④ クサガメ等が捕獲された場合は背甲長、雌雄を記録し放逐
 - ⑤ カミツキガメが捕獲された場合は、外来生物法に基づき対応。

■調査結果

2006年の初確認から2022年までに47頭が捕獲された。

新規加入個体をゼロと仮定して除去法で成体の個体数を推定した結果、20頭前後が生息し(図1)、2022年時点で4頭前後の成体が残存している可能性がある。

捕獲を継続することによって背甲長17cm以下の個体の年別捕獲割合が2018年の30%から2021年の76%に増加した(図2)。捕獲頭数は2021年の17頭が最大値で、2022年は幼体1頭(背甲長10.5cm)が捕獲された。

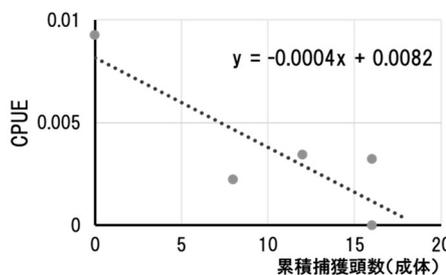


図1 累積捕獲頭数(成体)とCPUE(2018-2022)

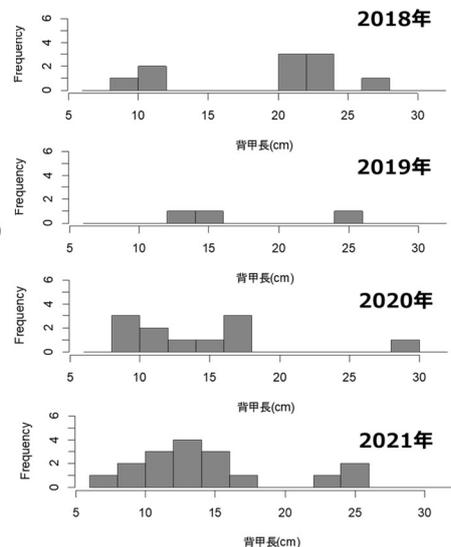


図2 捕獲されたカミツキガメ背甲長の頻度分布(2018-2021)

■考察と今後の対応

今回カミツキガメが捕獲された場所は、年間最低水温が10°C以上であり、本種は完全な休眠状態には至らない可能性もある。また、幼体の捕獲状況から複数年に渡って孵化成功している可能性が高い。

当該地域は外部から隔離され、比較的狭い水域における繁殖初期段階と想定している。捕獲作業を継続することで産卵抑制を図り、限りなく根絶に近い状態とすることが可能であると考えられる。